

二つの白法あり、よく衆生を救く。
一つには慚、二つには愧なり。（『涅槃経』）

慚愧、 よく衆生を救く

藤田徹文

目次	
一、「救く」とは……………	2
餓鬼 5 地獄 7	
畜生 11 人間・天人 13	
二、慚愧とは……………	14
三、慚愧なき身……………	20

表紙絵・カット／徂徠匡男
※『註釈版聖典』の引用は「第二版」を用いています。

一、「救く」とは

「われもひともし、生死をはなれんことこそ、諸仏の御本意」〔『歎異抄』註釈版聖典八四〇頁）であり、どうしたら「生死」を離れることができるかを明らかにしてくださいとされたのが仏教です。

「衆生を救く」というのが、「諸仏の御本意」ですから、「救く」とは「生死を離れること」なのです。

「生死を離れる」ままが、私たちの救かっていく相です。

「生死」とは迷いということ。迷いとは煩惱に引きずりまわされて、五悪趣を経めぐることです。

親鸞さまは『正信偈』で、
信を獲て見て敬ひ大きに慶喜すれば、

すなはち横に五悪趣を超越す。

（註釈版聖典二〇四頁）

と教えてくださいます。すなわち、「救く」とは「五悪趣を超越す」ることなのです。

五悪趣とは、地獄・餓鬼・畜生・人間・天人のことです。この五つの境界を経めぐる相を「生死流転」・「生死輪廻」・「生死輪転」といい、また単に「生死」ともいいます。

「救く」とは、この五悪趣を経めぐる「生死」を離れることなのです。このことを「生死出離」・「生死解脱」といいます。

「生死出離」といわれても、「五悪趣を超越す」といわれても、みなさんにはピンとこないかも知れません。なぜならば、それが自分のことだと思えないからです。

実は、私たちは、今、正に五悪趣の真只中にいるのです。だから、親鸞さま

の先生である法然さまが師と仰がれた中国の善導大師は、

歸去来、魔郷（生死の迷いの世界）には停まるべからず。

曠劫よりこのかた流転して、六道（五悪趣に修羅を加えた迷いの世界）ことごとく
とくみな経たり。

到る処に余の楽なし、ただ秋歎の声を聞く。

〔『観経疏』註釈版聖典七祖篇四〇六頁・カッコ内注記筆者（以下同）〕

とすすめてくださるのです。

私たちは、真に信頼できるもの（阿弥陀さまの本願）を見失い、結局、あてた
よりになるのは自分一人と、明けても暮れても「我」に執着し、「我」が通る
と喜び、「我」が通らないと悲しみ、時には周りの人に当たったり、グチをこぼ
したりして生きています。

私たちの「我」の中味は、身を煩わし、心を悩ます煩惱です。妙好人と讃

えられた才市同行は「煩惱に目鼻つけたがわが姿」といいましたが、本当だ
と思います。

私たちは執着したものに逆に縛られます。この世にはお金に執着し、お金に
縛られている人のなんと多いことでしょうか。

「私はお金などに執着していない」という人はいるかも知れませんが、「我」
に執着のない人は一人もいないでしょう。私たちの「我」は煩惱ですから、私
たちは知らず知らずのうちに煩惱に執着し、煩惱に縛られて生きています。

煩惱に縛られ、「煩惱」の命ずるままに生きるこの身は、本人が全く気づか
ないうちに五悪趣を経めぐる「生死流転」の身となっているのです。

餓鬼

人生が、すこし思うようになると、私たちの胸底から湧き出してくるのは